

5-2 コシアカツバメ

① コシアカツバメの巣の分布状況(2017)

平成 28 (2016) 年の予備調査結果を踏まえ、平成 29 (2017) 年に可能な限り多くのコシアカツバメの巣の発見に努めた。本種は、5 階建ての中層住宅の最上階に営巣する事から、30 年前に営巣していた東寺方団地、和田団地、諏訪団地、永山団地を中心に 5 階まで上って調査した。

その結果、平成 29 (2017) 年に調査地域において、繁殖した建物数を 23 棟、繁殖した巣及び繁殖した可能性のあった巣を 33 巣確認した。

確認した建物数及び巣数の確認数を表 5-8 に、建物の分布図を図 5-16 に示す。図 5-1 に平成 29 (2017) 年に繁殖した巣だけでなく、未使用巣のある建物も示している。

表 5-8 コシアカツバメの繁殖確認数と密度(2017)

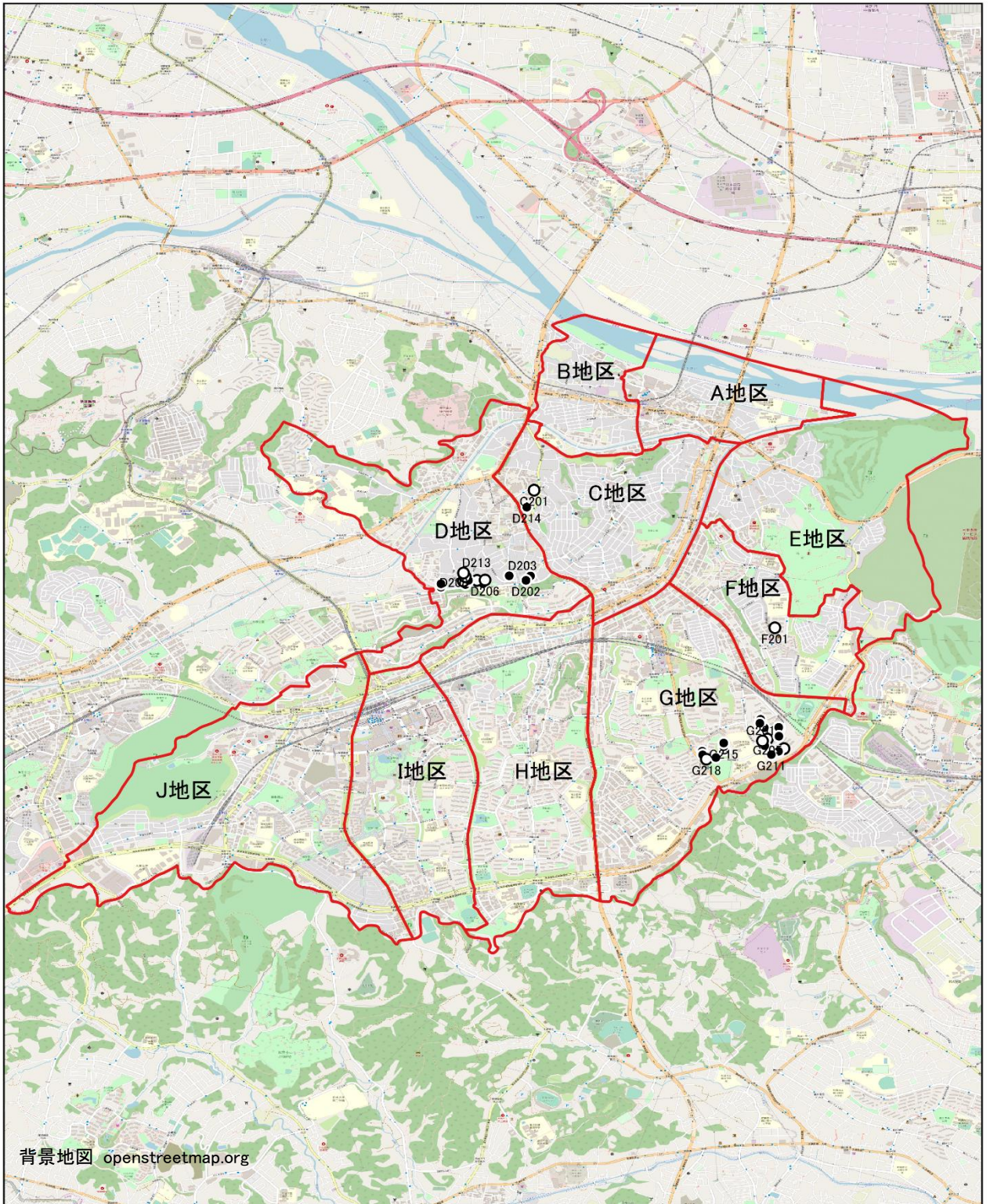
調査地区	繁殖建物数 (棟)	繁殖建物密度 (棟/km ²)	繁殖巣数 (巣)	繁殖密度 (巣/km ²)
多摩市全域	23	1.1	33	1.6

調査結果の特徴として、巣が多かった場所として以下の 3 点があげられる。



- 主に東寺方団地、和田団地、諏訪団地 (全て都営団地) の中層住宅の最上階 (5 階) の階段室の天井に営巣していた。市内には他の地域にも 5 階建ての中層住宅があるが、階段室の構造の違いにより営巣していない可能性がある。(図 5-15)
- 中層住宅以外では、諏訪団地のすみれ幼稚園、東寺方の多摩スポーツセンターで営巣が確認された。



図 5-15 中層住宅でのコシアカツバメの繁殖状況



背景地図 openstreetmap.org

	<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 繁殖巣のある建物 ○ 未使用巣のある建物 	<p>0 500 1000 m</p> 
<p>図 5-16 コシアカツバメの巣のある建物の分布図(2017)</p>		

② 30年前との比較

30年前の調査及び集計の方法が明確に記録されていないため、厳密な比較は難しいものの、繁殖した巣の数だけで見ると、表 5-9 に示す通り、巣のあった建物の棟数で見ると、27 棟から 23 棟に 15%減少した。巣の数は 59 巣から 33 巣と 45%減少した。

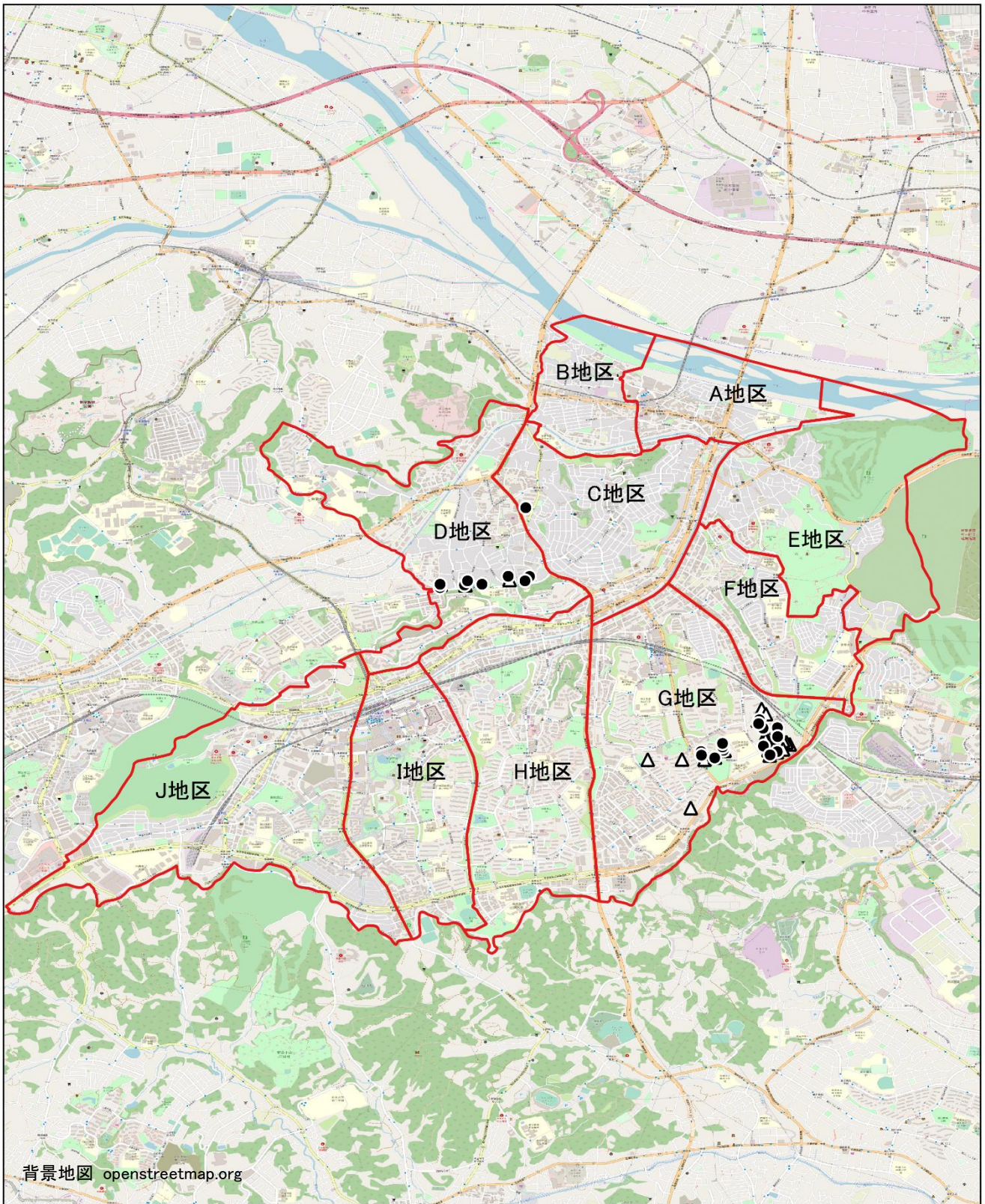
営巣地の変化を図 5-17 に示す。D 地区の東寺方団地・和田団地については 30 年前より増加している。しかし G 地区の諏訪団地については、減少傾向がうかがえる。永山団地についてはコシアカツバメの営巣地は消失した。

今後、コシアカツバメの営巣する中層住宅は建て替えが検討されており、今後のコシアカツバメの営巣地については留意が必要である。

コシアカツバメは、西日本に多く分布するが、中層住宅に特異的に営巣する特性はない。東京周辺では中層住宅にだけ営巣する特性があるが、その理由はよくわかっていない。今回の調査では、30 年前には確認されなかった中層住宅以外のすみれ幼稚園、多摩スポーツセンターで営巣が確認された。コシアカツバメの営巣特性の変化を示している可能性もあり、注目に値する。

表 5-9 コシアカツバメの繁殖状況の 30 年間の変化

区分	昭和 62 (1987)	平成 29 (2017)
繁殖した巣のある建物数	27 棟	23 棟
繁殖が確認された巣数 (不明の巣含む)	59 巣	33 巣
古巣 (繁殖に使われなかった巣)	43 巣	33 巣



凡例

- 繁殖が確認された建物(2017)
- △ 繁殖が確認された建物(1987)

0 500 1000 m



図 5-17 コシアカツバメの巢のある建物の 30 年の比較



5-3 イワツバメ

① イワツバメの巣の分布状況(2017)

平成 28 (2016) 年の予備調査結果を踏まえ、平成 29 (2017) 年に可能な限り多くのイワツバメの巣の発見に努めた。イワツバメの営巣適地である多摩川、大栗川、乞田川の橋梁、その他鉄道高架などを中心に調査した。

その結果、平成 29 (2017) 年に調査地域において、繁殖した構造物を 7 カ所、繁殖した巣及び繁殖した可能性のあった巣を少なくとも 36 巣確認した。

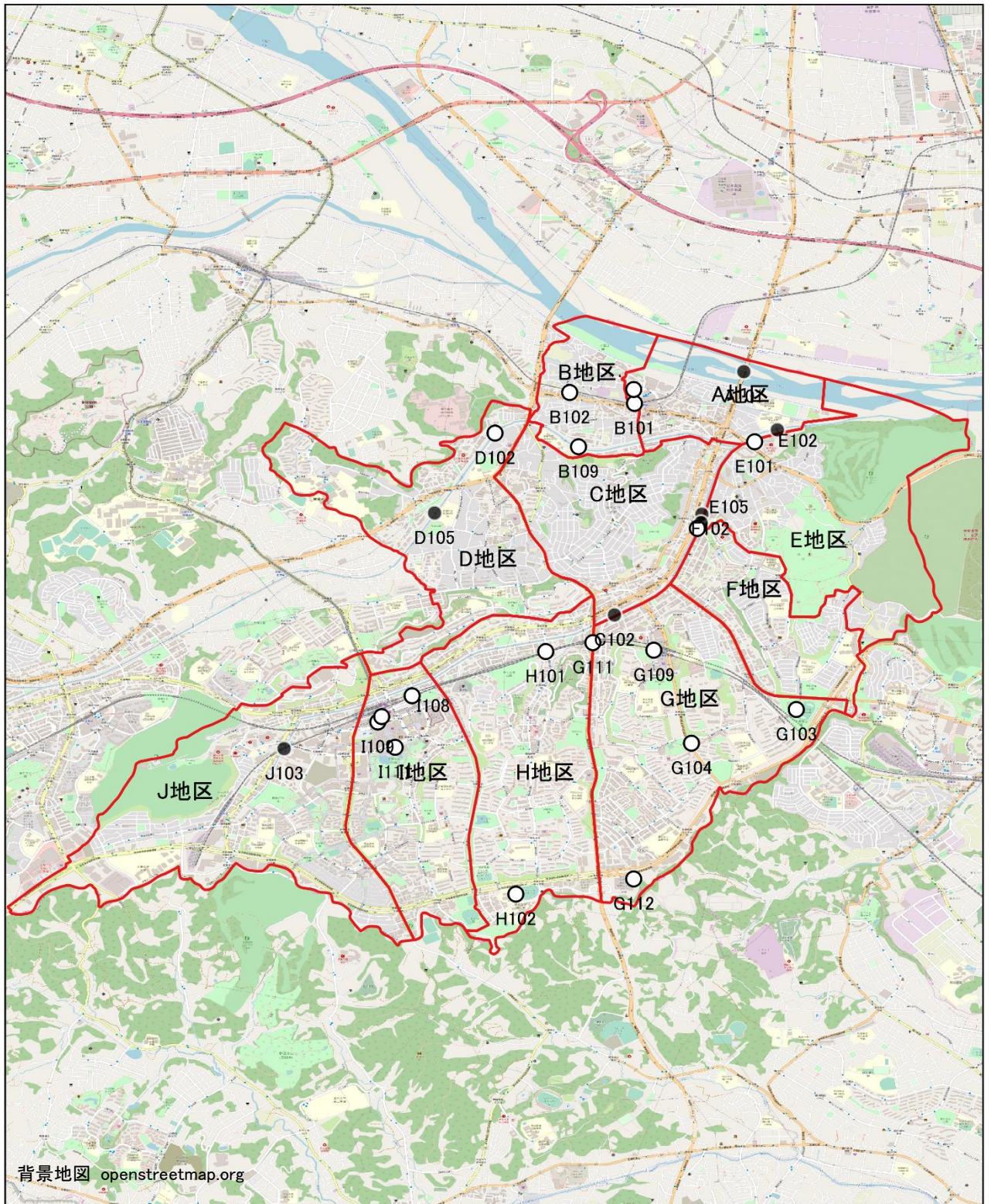
確認した建物数及び巣数の確認数を表 5-10 に、建物の分布図を図 5-18 に示す。図 5-18 には平成 29 (2017) 年に繁殖した構造物だけでなく、未使用巣のある構造物も示している。

営巣場所としては、関戸橋、報恩橋、熊野橋などの河川橋梁に多くの営巣が確認された。

図 5-19 及び 20 に示す通り、関戸橋、報恩橋は大規模なコロニーとなっている。一方、図 5-21 に示す通り、永山駅の高架下は大規模なコロニーで平成 28 (2016) 年は繁殖していた少数の巣があったが、平成 29 (2017) 年は全く繁殖が確認できず多くの古巣を残すのみであった。

表 5-10 イワツバメの繁殖確認数と密度(2017)

調査地区	繁殖建物数 (カ所)	繁殖建物密度 (カ所/km ²)	繁殖巣数 (巣)	繁殖密度 (巣/km ²)
多摩市全域	7	0.3	36	1.6



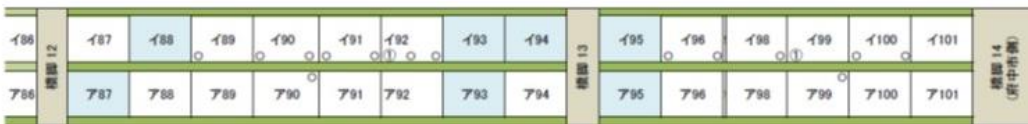
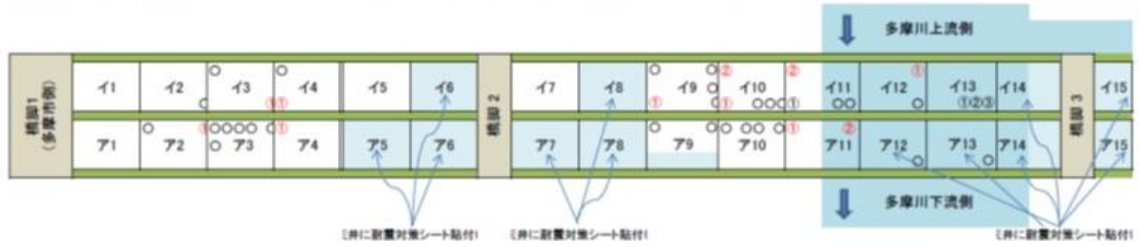
凡例

- 繁殖巣のある構造物
- 未使用巣のある構造物

0 500 1000 m



図 5-18 イワツバメの巣のある構造物の分布図(2017)



- ① 完全な巣
- ② 利用されている巣 (イワツバメの出入りを確認)
- 破損した巣、巣の痕跡

天井に耐震対策シートを貼り付けたと思われる区域

図 5-19 関戸橋でのイワツバメの繁殖状況(2017)

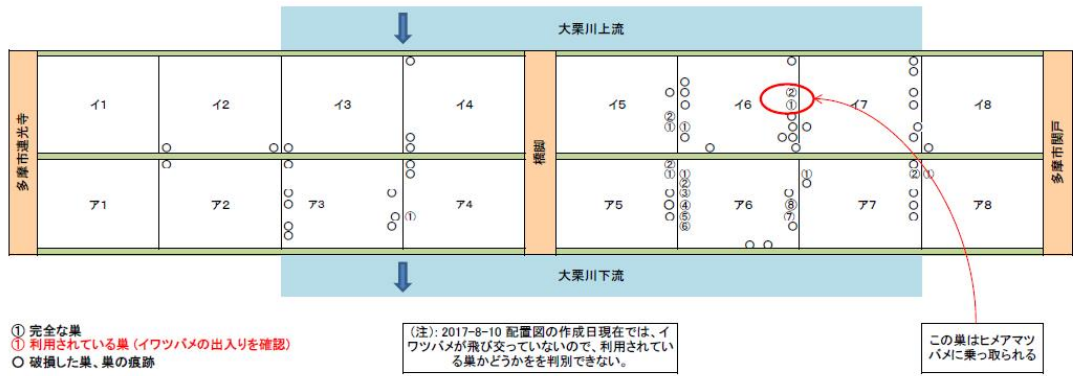
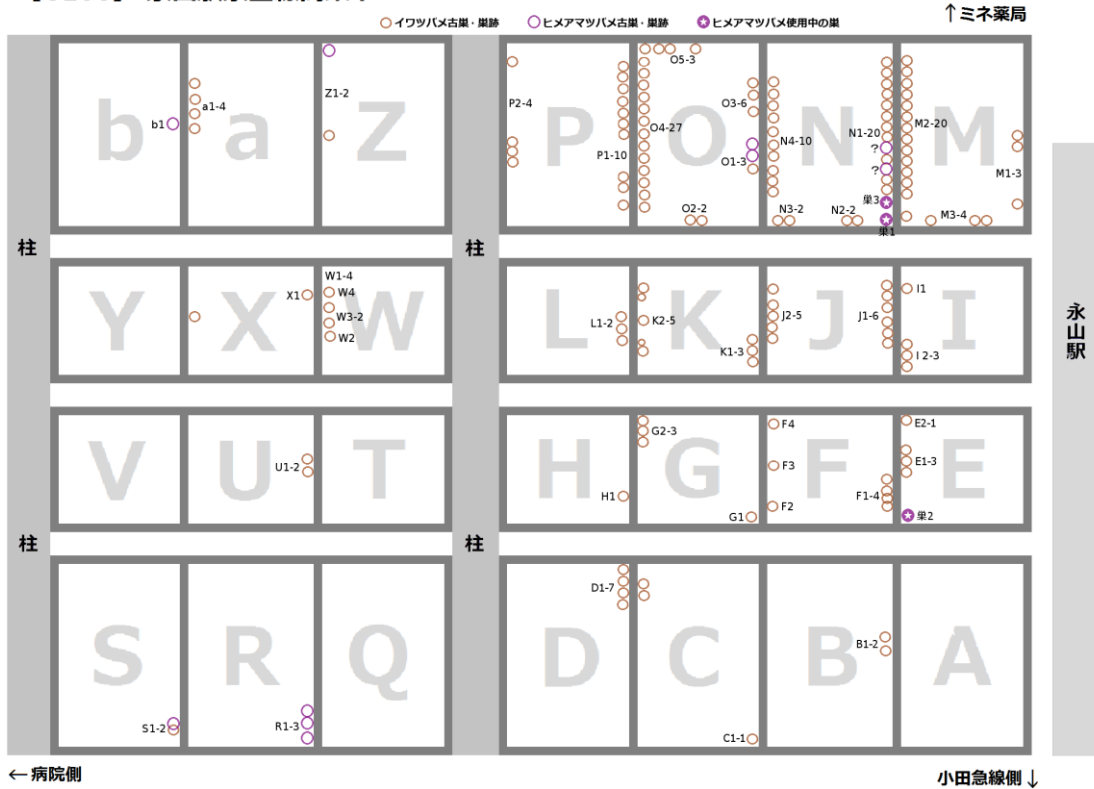


図 5-20 報恩橋でのイワツバメの繁殖状況(2017)

【G108】 永山駅京王線高架下



【G109】 永山駅小田急線高架下

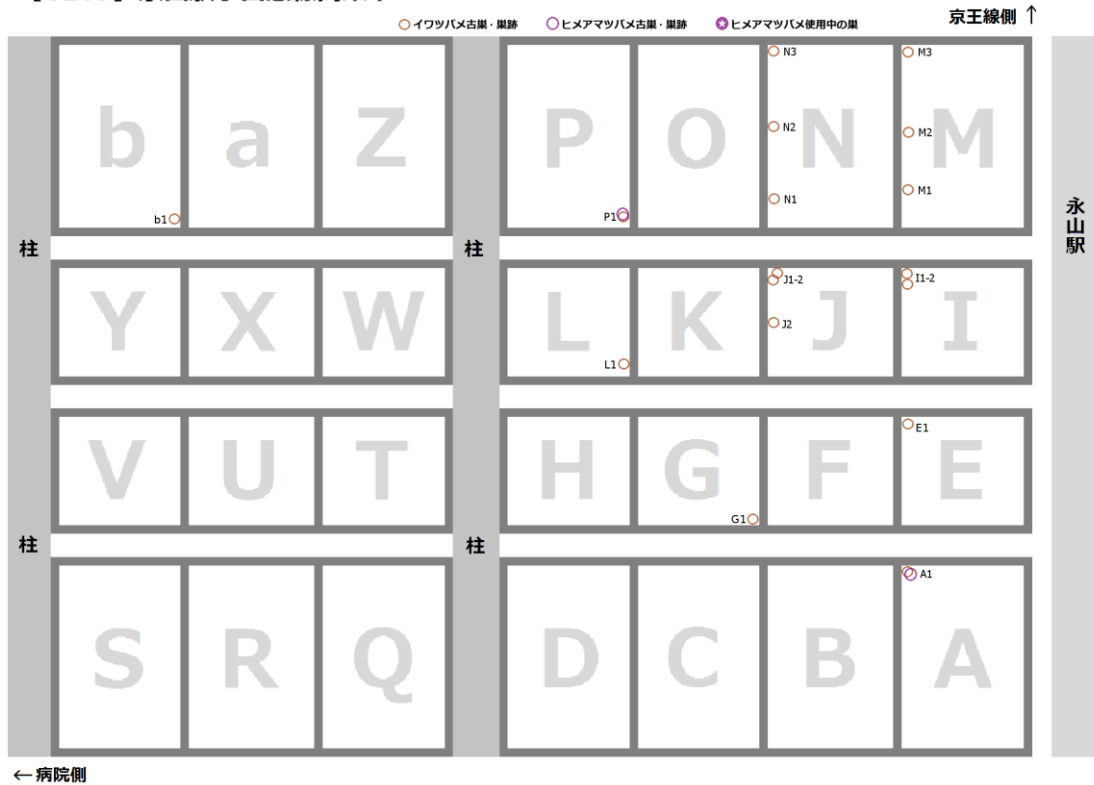


図 5-21 永山でのイワツバメ(及びヒメアマツバメ)の繁殖状況(2017)

② 30年前との比較

30年前の調査及び集計の方法が明確に記録されていないため、厳密な比較は難しいものの、繁殖した巣の数だけで見ると、表 5-11 に示す通り、巣のあった構造物のカ所数で見ると、18カ所から7カ所に61%減少した。巣の数は137巣から36巣と74%減少した。

営巣地の変化を図 5-22 に示す。全体的に営巣地が減少しているとともに、昭和 62 (1987) 年に営巣していた橋梁や高架以外の建物での営巣が平成 29 (2017) 年には消失した。

最大の営巣地である多摩川の関戸橋は架け替え工事が開始されており、ますます減少する可能性がある。

なお、図 5-23 に示す通り、多摩市及びその周辺には元来イワツバメは繁殖しておらず、長野県の松本から昭和 6 (1931) 年に放鳥された経緯がある。一方で市内に定着したのは昭和 40 (1965) 年である。多摩市でイワツバメが大幅に減少した理由については不明である。

表 5-11 イワツバメの繁殖状況の 30 年間の変化

区分	昭和 62 (1987)	平成 29 (2017)
繁殖した巣のある構造物数	18カ所	7カ所
繁殖が確認された巣数	137巣	36巣

1. 連光寺にあった農商務省鳥獣実験場(大正8年,1919年設置)が有益鳥類の研究を実施
2. 山地に生息するイワツバメが平地農村に定着すれば害虫駆除に役立つと期待
3. 石井時彦技師が昭和2年(1927年)に長野県松本市浅間温泉からイワツバメのヒナを取り寄せて人工飼育開始
4. 昭和6年(1931年)に89羽を放鳥。すぐ近くの聖蹟記念館や八王子市で営巣を確認。



出典:多摩のどうぶつ物語(2010,パルテノン多摩)

図 5-23 多摩市へのイワツバメ移入の経緯



背景地図 openstreetmap.org



凡例

- 繁殖が確認された構造物(2017)
- △ 繁殖が確認された構造物(1987)

0 500 1000 m



図 5-22 1987 年及び 2017 年の繁殖巣のある構造物(イワツバメ)

5-4 ヒメアマツバメ

平成 28 (2016) 年の予備調査結果を踏まえ、平成 29 (2017) 年に可能な限り多くのヒメアマツバメの巣の発見に努めた。イワツバメの古巣を補修して使う事が多いので、イワツバメの営巣適地である多摩川、大栗川、乞田川の橋梁、その他鉄道高架などを中心に調査した。

ヒメアマツバメの平成 29 (2017) 年の繁殖状況及び昭和 62 (1987) 年の繁殖状況を表 5-12 及び図 5-25 に示す。

平成 29 (2017) 年に調査地域において、繁殖した構造物を 3 カ所、繁殖した巣及び繁殖した可能性のあった巣を少なくとも 5 巣確認した。パルテノン多摩の巣は、イワツバメかツバメの古巣を利用したものであった。

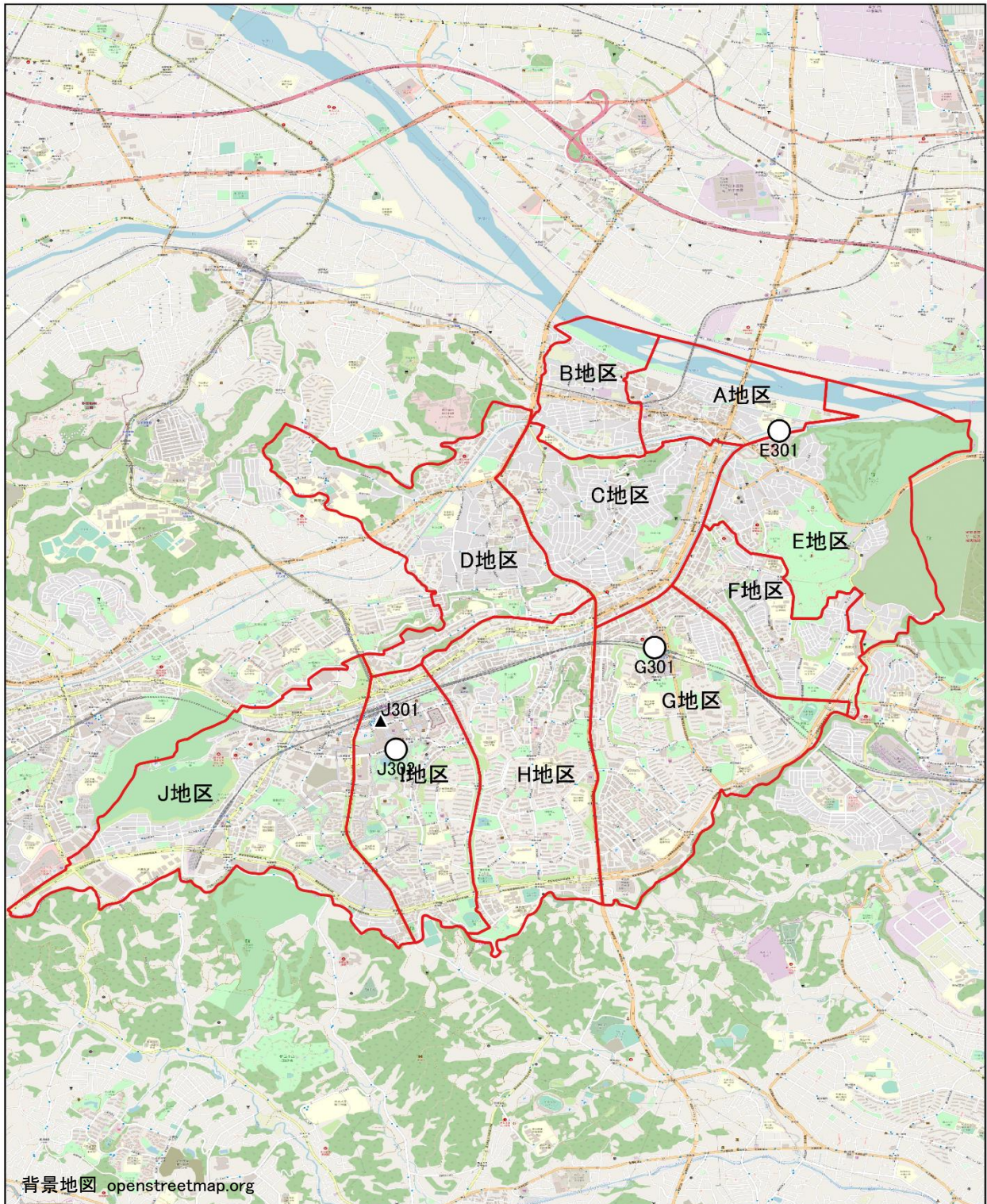
昭和 62 (1987) 年は 1 カ所 4 巣の確認であったので、分布は少し広がっているかもしれない。

表 5-12 ヒメアマツバメの繁殖状況の 30 年間の変化

区分	昭和 62 (1987)	平成 29 (2017)
繁殖した巣のある構造物数	1 カ所	3 カ所
繁殖が確認された巣数	4 巣	5 巣



図 5-24 パルテノン多摩のヒメアマツバメの繁殖状況(2017)



- 凡例 ● 繁殖が確認された構造物(2017)
 △ 繁殖が確認された構造物(1987)

0 500 1000 m

図 5-25 1987 年及び 2017 年の繁殖巣のある構造物(ヒメアマツバメ)